

文化・芸術

「女性の半身像」

1930年ごろ、油彩、カンバス
45・5寸×38・0寸

マリー・ローランサン (1883～1956年)

マリー・ローランサンはパリに生まれ、1906年ごろからモンマルトルの集合アトリエ「洗濯船」に出入りし、ピカソやブラックなどキュビズムの画家とも交流しました。女性が社会で活躍した両大戦間には画家として注目を浴び、多くの女性の肖像画を手掛けます。本作は肖像画家として活躍した画家の円熟期の一点。それまでの三角形の輪郭のぼっそりとした女性像からふっくらとしたぼろ色の頬の女性像へと変化しています。

1930年代は緑色など色彩もより用いられ、灰色を基調とした画面から華やかに彩られた画面に展開しています。乳白色の肌に淡いピンクの配された独特の画面で、女性の身に着ける真珠は、しばしば描き込まれる女性の美しさを引き立てる装飾品。静かに視線を外した瞳は憂いを帯びて見え、美しく華やかな女性の内面に秘められた影を感じさせます。

7月15日からの企画展「20世紀アートセレクション」で展示します。

(大谷)



〈名画の扉〉

大川美術館コレクションから